

グローバル社会だからこそ必要な感染症科医！ 派遣先の国とWin-Winの関係で、安全な世の中をつくる

今号は、2016年6月に国立国際医療研究センターに入ってから以降、感染症科の臨床医としての経験を活かし、海外の感染症関連のプロジェクトや、研修運営などに携わっている運営企画部・保健医療開発課の法月正太郎先生に感染症科医の仕事や、海外派遣での活動について伺った。



国際医療協力局
運営企画部・保健医療開発課
法月 正太郎 氏

感染症は 外部要因を知ることが重要

法月先生は、感染症科医とお聞きしています。あまり耳慣れない診療科なのですが。

法月 感染症科医は、日本ではとても少ないですね。感染症科医の仕事は、海外から入ってくる感染症やインフルエンザなどへの対応もありますが、日常的には病院でのコンサルテーションの仕事が多く、例えば入院患者さんが発熱していたら、担当の医師と一緒に発熱原因を調べ、必要な検査や適正な抗菌薬などについてのアドバイスをしています。国際医療に携わることになった経緯を教えてください。

法月 近年は世界がドンドン狭くなり、いろいろな病気が一瞬で世界中に広がるようになってきました。特に感染症の分野では影響が大きく、日本でも海外帰りの日本人や、海外から訪日される方を介して、感染症が入ってくるリスクが高まっています。感染症では外部要因を知ることが非常に重要なので、感染症科医としてレベルアップするためにも、国際的な仕事をしたと思っています。

2016年6月に国立国際医療研究センター(NCGM)に入ってから以降、これまでにブラジルとコンゴ民主共和国、ラオスに数週間ずつ行き、その間には、NCGMを中心とした施設で海外からの研修生向けに行う研修で、院内感染や母子保健のコースに携わってきました。

各国のプロジェクトはどのような内容でしたか。
法月 まず直近に行ったラオスは、ワクチンの質を評価するプロジェクトです。ワクチンは「ナマ物」なので、工場出荷から接種するまできちんとした温度管理が必要です。管理が適切でないと、投与しても効果がない可能性があるので、ワクチン接種による抗体の有無を調べることで、投

与の方法や安全性、管理体制を評価しました。

またコンゴ民主共和国は、エボラウイルス発祥の地といわれ、感染症には度々対応した経験がある国です。今回のプロジェクトは、感染症発生時の対処について、どのくらい準備が整っているかを調査するものでした。

その時たまたま隣国のアンゴラで黄熱病が流行っており、アンゴラとの国境地帯および首都キンシャサでも黄熱病患者が報告されています。黄熱病はワクチンで防ぐことができますので、コンゴ民主共和国で蚊が増える9月までに、キンシャサの約1000万人全員に2週間間でワクチンを投与するというキャンペーンが行われました。通常は投与しない妊婦や免疫が低下している人も含めて全員に投与するというもので、ワクチン不足を補うために投与量は通常の5分の1にし、接種しやすいようにあちこちにワクチンスタンドのような場を設けるなど、キャンペーンの様子を間近で見ることができました。

日本ではそのような思い切ったキャンペーンは難しいかもしれませんね。

法月 そうですね。おそらく日本では接種したくない人も出てくるでしょうね。

ただ黄熱病は治療することができず、対処療法しかない怖い病気です。コンゴ民主共和国の現状の医療システムでは、感染が拡大したら対処することができないので、この緊急事態を収束させる唯一の方法だったのだと思います。病気の拡散を防

いだことはあまり報道されませんが、実はコンゴ民主共和国の取り組みによって、黄熱病が世界に拡散することを防いでいたのです。

妊婦のジカ熱感染による 小頭症の調査でブラジルへ

では、ブラジルでのプロジェクトは。

法月 ジカ熱に関する現状評価と啓発です。2015年から2016年春頃にかけて、アマゾン川に近いブラジルの北東部で、小頭症の子どもが通常より多く生まれました。調査の結果、妊婦のジカ熱感染が原因であることが判明したため、現地の状況を調査するために、北東部のパラíba州に行きました。それまでジカ熱と小頭症の因果関係は知られておらず、啓発活動も行われていませんでした。

広大な国土を持つブラジルは、都市部と地方では大きな格差があります。五輪でも注目されたリオデジャネイロなどの都会は医療環境も整っています。特に北部はいわゆる途上国に近い状況です。今回ジカ熱が多く発生した地域も、都心部に比べると医療が届いていない地域でした。

ジカ熱とはどのような病気なのですか。

法月 蚊が媒介するジカウイルスに感染することで発症する病気です。発熱や結膜炎、発疹などの症状が出ます。ブラジルに限らず中南米の国々、アメリカのフロリダ州、タイやベトナム、シンガポールなどの東南アジア、タヒチでも報告されています。基本的には比較的マイルドな病

気で、 Dengue 熱などは異なり亡くなる方もほとんどなく、自分がジカ熱にかかっていることに気付かない人も多いです。小頭症の赤ちゃんを出産したお母さんも、半数はジカ熱にかかったという自覚がないといわれています。

妊婦だけでなくパートナーが感染していると、精液を介して感染することも報告されていますので、現地で生活する人だけでなく、流行地域に出かける日本人も、妊娠している、あるいは妊娠活動中の場合は、特に蚊に刺されないように注意する必要があります。

——ブラジルでは、具体的にはどのような活動をしたのですか。

法月 医療の格差を補完するために、先天性心疾患の子どもたちの治療やフォローしている NGO があり、キャラバン隊を組んで北部の各都市を回っていました。今回、小頭症の子どもがたくさん生まれたのも同じエリアだったため、このキャラバン隊に同行する形で、約2週間、毎日1都市ずつ13都市を回り、患者さんの治療や蚊に刺されないための啓発活動などを行いました。

医療の地域格差は、発展段階にある国々で問題になっていることの一つです。この NGO の活動は、地域格差や医師の偏在、医療の質の向上に対するオプシオンとして実践され、結果も出しているので、一緒に行動させてもらってとても勉強になりました。

——2週間で13都市とは、かなりハードですね。

法月 はい。毎回小学校や体育館のような場所に、診察室、検査室、カウンセリング室やネットワーク環境など、仮設の施設を準備することから始まります。私は待合室で、蚊に刺されないようにする方法をレクチ

ヤーしたり、現地の人を作った啓発のためのダンスを一緒に踊ったりしました。

診察が終わったら、全部片付けて、翌日の場所に移動です。1時間ぐらいで着けばいいのですが、4時間ぐらいかかる場所もあって、0時過ぎに夕食という日もありました。現地の人たちにはとても歓迎され、行く先々で度々歓迎パーティーがありました。結構ハードなキャラバンでしたね。

——ブラジルは初めてだったそうですが、どんな印象でしたか。

法月 やはりラテン系なので、とにかく皆さん明るいですね。生演奏と歌が始まると、みんな踊りだします。私も踊ることに抵抗はないので、すぐに馴染んで一緒に楽しみました。宿泊はホテルで、日本の国立感染症研究所の先生方と3人で相部屋でした。たまには水シャワーということもありましたが、この歳になって一つの部屋に3人で生活するのも、学生時代の合宿のようで楽しかったです。

海外の仕事は「支援」というより、「一緒にやっていく」というスタンスの方が良い!?

——法月先生は、なぜ医師になったのですか。

法月 好きだからだと思います。中学生の時には、友人のお父さんが病理医だったので、取り出した臓器を病院で見せてもらったこともあり、家族に医療従事者はいませんが、その頃から興味があつたように、漫画のブラック・ジャックを読んでいた時期もありました。——お話を聞いていると外科系がお好きなように感じのですが、なぜ感染症科医に。

法月 もともととは外科系が好きで、消化器外科、循環器内科、感染症科の三つで迷いました。一般に病気は自分の中から発生しますが、感染症は敵が見える。外敵をやっつけるところが面白いと思つたのが、感染症科を選んだ理由の一つです。

また感染症科は、患者さんの話を聞くことで診断していきます。食べもの、行った国、出ている症状などを聞いて、想定される病気を考えた上で、適切な検査をし、最終的に診断します。症状は患者さんの免疫力などによってさまざまですし、発熱していても感染症でないこともあるので、幅広い症例を知っておかなければなりません。そのため研修ではまず総合診療のトレーニングを3年間受けました。一つ一つ手掛かりを集めたり、検証したりしながら原因を突き止めていく手法は、シャイロック・ホームズのように、感染症の面白さでもあります。

しかも感染症は早い判断、早い行動が重要で、何か起きた時には緊急対処をしなければいけない。臨戦態勢の中で感染拡大を抑えていくこともやりがいがあります。

——今後はどのようなことをしたいのですか。

法月 医療が不十分な地域や途上国に比べれば、日本では早期に発見され早く対処できる可能性は高いかもしれません。でも普段から感染症に対する備えがなければ、感染拡大が起こらないとは言えません。過去の海外の例を見ると、患者さんが等比較的に増加するのは医療機関です。患者さんと医療従事者の間で感染が広がるのです。ですから、院内での感染拡大を防ぐ対策や、最もリスクにさらされている医療従事者を守るなど、危機管理能力を強化するような仕事もしたいです。

ね。NCGMで行っている世界中から医療従事者が集まる医療関連感染の研修にも引き続き関わり、横のつながりも増やしていきたいと思っています。

——最後に読者にメッセージをお願いします。

法月 海外も含めた医療の仕事はともやりがいがありますし、視野も広がりますが、海外で仕事をするためには、きちんとトレーニングを受けて、ベースを作っておくことがとても大事だと思います。

また海外の仕事は「支援」というより、「一緒にやっていく」というスタンスの方が良いのではないかと考えています。私も派遣先では、感染症について非常に多くのことを学ばせてもらっています。現地の問題を一緒に解決することで、もし日本に入ってきた時にどう対処すべきかをトレーニングをさせてもらっているという認識です。支援することがゴールではなく、お互い Win-Win の関係で、安全な世の中をつくっていくことが大事だと思います。



蚊の被り物をして、子どもたちと歌って踊る法月氏(左)